

研究課題	さかわ未来学を基盤にすえた学校運営をめざして
副題	～ふるさと力・未来創造力・人間力を育てる～
キーワード	未来 ふるさと
学校/団体名	佐川町立斗賀野小学校
所在地	〒789-1233 高知県高岡郡佐川町中組 77
ホームページ	

1. 研究の背景

本校が位置する佐川町は、豊かな自然と歴史的な景観に恵まれ、牧野富太郎や田中光顕等多くの偉人を輩出してきた。しかし、情報技術の進歩、少子高齢化、過疎化などの変化の波に襲われ、家庭や地域コミュニティの変容が進み、不登校等学校生活に適応しにくい児童の増加や学力の二極化等、児童をめぐる課題が目立ってきた。町民へのアンケートを取ってみると、「文教のまち」を町として掲げておきながら、「文教のまち」の所以を知らない児童も多い。

そこで上記の課題を克服するために「さかわ未来学構想」を策定し本年度から実施を始めた。

2. 研究の目的

本校ではさかわ未来学の目的を以下の通りに設定し、活動することにした。

(目的)

- ・自分や他者を大切にできる、豊かな心の育成
- ・ふるさとに愛着と誇りを持ち、社会に貢献できる人づくり
- ・生涯にわたり、学ぶ機会を創出し、豊かな人生を支援

3. 研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
4月	研究及び組織の確認 さかわ未来学についてのカリキュラムの作成 花まる打合せ：1年	
5月	牧野きゅうりの打ち合わせ：4年 花まる（デカルコマニー）授業：1年	感想・発言・参加教員アンケート
6月	論語学習の打ち合わせ：6年 花まる（フロッタージュ）授業研究：1年 牧野きゅうり：4年 プログラミング的思考学習会	感想・発言・授業評価・参加教員アンケート
7月	プログラミング学習：6年 牧野きゅうり：4年	感想・日記・発言
10月	論語学習：5年 6年 プログラミング学習：3年 花まる（自然物に描く）：1年	感想・発言・授業評価・参加教員アンケート
11月	花まる（色で遊ぶ）：1年 論語学習：5年 6年	感想・発言・授業評価・参加教員アンケート
12月	プログラミング学習：5年 花まる（モザイクアート）：1年 論語学習：5年 6年	感想・発言・授業評価・参加教員アンケート
1月	花まる（木の枝と糸で制作）：1年 さかわ未来学学年発表会	感想・発言・授業評価・参加教員アンケート

	論語学習：5年 6年	
2月	論語：5年 論語取り組み報告会	
3月	花まる取り組み報告会	

(1) さかわ未来学とは

さかわ未来学では未来創造力、ふるさと力、人間力の3つの力を育てることをねらっている。

① 未来創造力とは

自ら考え、課題解決を図る基礎的な力を培うとともに、個性を伸ばし、表現することができるようアートやプログラミング教育などを行い、仕事を自分で創り出す発想を持つなど、未来を自らの手で切り拓く力を身につけることをねらっている。

② ふるさと力とは

歴史や文化、自然、産業など、過去の積み重ねで今の佐川町があり、また、今この瞬間が未来につながっていくことを実感できる学びを行うことをねらっている。そして、ふるさとを愛し、自分たちの、そして、佐川町の未来を、前向きに考える力を身につけることをねらっている。

③ 人間力とは

生きていく上での基になる思いやりや感謝、素直さ、前向きさ、忍耐力などについて、道徳や論語、栽培体験、職業体験などを通じ、実感を伴って学ぶ。そのことにより、人間力を培い、高めたいと考えている。

4. 代表的な実践

I 花まる学習会（1年）

(1) 導入の目的

本年度は、未来創造力を育成するために花まる学習会の手法を取り入れた。花まる学習会では、非認知能力を育てることを目指し、そのために創作活動に取り組んでいる。

この花まる学習会のプログラムを本校と、校区にある2つの保育所で取り組み、小1プロブレムの解消を目指した。取り入れた理由としては以下の4点がある。

活動	支援（表1）
1 授業のルールの確認	○学習の上での3つのきまりを確認する。
2 素材や道具についての確認	
3 創作タイム	○3つのルールに従い作品をつくる
4 後片付け	
5 鑑賞	○指導者が鑑賞の言葉を伝えていく。
	○学習者が作品について鑑賞の言葉を伝える。
6 終了の挨拶	

○児童の主体性を十分尊重し、適切にフィードバックすることによって、技能面や創造的な構想力を養うことができること。

○創作活動と鑑賞活動を常に一連のパッケージとして提供することで、学習指導要領における「表現」と「鑑賞」の関連付けが図られること。

○担任教員にとっては、児童の良い面や持ち味を存分に認め、発見する機会となり、通常の学級運営に生かすことにより、児童の学ぶ意欲を引き出すことができること。

授業は年間6回花まる学習会から講師を招き、1回につき2校時を使用し行った。どの授業とも表1に沿った展開で、素材や道具を変えて行った。

(2) 実践内容 「6月25日（木）フロッタージュ」

①展開

花まる学習会の授業では児童と、①自由にやりたいように作る。②うまくいかなくてもくじけない。③時間が来たらおしまい。を学習の約束として行う。

素材や道具についての確認では、素材を観察させ、気づいたことを児童の言葉で発言させる。道具の使い方も教え込まずに、児童に考えさせ、児童が「やりたくて仕方がない」気持ちになった時に創作タイムに入る。

創作タイムでは、まず、素材としての葉を選ぶ。それを紙の下に敷き、上からクレヨンでこすった。次に個々に作成したものを全員の前で指導者がコメントを入れて紹介する。児童と上記の①～③を確認しているので、児童は創作活動では安心して活動に没頭する。本時ではクレヨンで色を塗るだけの活動であったが、児童ははさみで切ったりし、自由な創作活動に発展させた。(写真1)。



写真1

② 成果と課題

(参加教員のふりかえりより)

毎回授業が終わった放課後に1時間程度、担任教諭と講師および見学した教員でふりかえりを行った。

その中で、

- ・子どもたちがさらに生き生きと自分の思いを言うようになった。
- ・自分自身、好ましくない行動には目をつぶり、好ましい行動を見つけた時には具体的に「○○だから素敵だね」と伝えることができるようになってきたかなと思います。そして、子どもに対してイライラすることがなくなりました。

というものがあつた。

(児童の変化)

1年生では学習の様々な場面で絵を描く活動を行う。A子は絵を描く時にはなかなか取り掛からず動けなくなることが多い。6月に図画工作科「長い紙を使って書こう」では、担任が花や草、ウサギや犬などA子が書けるであろうものをいくつか提示し、その中から選び、担任が輪郭を描き、A子が色を塗るという過程を経て仕上げていた。普段から自分に自信がなく、大変表現が苦手の児童である。

そのA子が本時では、葉を選ぶこと、色を決めること、色を塗ること、それぞれの活動とも担任の支援を必要とせず完成させた。A子にとって自信をもって行える活動となっていた。

Ⅱ 牧野きゅうり(4年)

(1) 導入の目的

本町出身の先人の中に牧野富太郎(植物学者)がいる。児童もこの名前は聞いたことがあり、中学年の社会科の中で扱っている。さかわ未来学のカリキュラムの中でも牧野富太郎はコンテンツとしても欠かすことのできない存在である。

また、本校では長年にわたり農業体験に取り組んでいる。学校田ではもち米を、学校菜園では小麦・じゃがいも・サツマイモ等、様々な野菜を育てる活動をしている。この活動が何年にもわ

たって行えている理由としては、地域にある NPO 法人とかの元気村の存在がある。とかの元気村は住民参加のまちづくり、および地域振興をおこなう NPO として、本年度で 16 年目の活動を誇っている。その組織の文化教育部会と連携し、地域支援本部事業の一環で農業体験の手伝いをお願いしている。

その活動が背景としてあったうえで、牧野富太郎が収集していたきゅうりの種が地域の中にあることがわかり、ふるさと教育の一環として 4 年生で栽培することにした。

(2) 展開 (5/19~7/30)

まず、とかの元気村の森さんに来ていただき、きっかけづくりの話をしていただいた。森さんからは日本中にその地方にしかない伝統野菜があること。佐川町にも牧野富太郎が大好きだったきゅうりがあり、ぜひそれを育ててほしいとの話をいただき、児童はそれをそだてることにした。

児童は、種植、苗植え、収穫、食すことを行った。その際に、牧野きゅうりのみを植えるのではなく、市販されているきゅうりも同時に植えて違いを観察させた。比較させるものを同時に植えたので児童の観察も比較が中心になった。

- ・普通のきゅうりと比べて牧野きゅうりは育つのが遅い。
- ・葉の色が牧野きゅうりのほうが普通のきゅうりよりも濃い。
- ・普通のきゅうりはいっぱい芽が出ているけれど、牧野きゅうりは一つしか出ていない。
- ・普通のきゅうりは、全てのポットから芽が出ているが牧野きゅうりは芽が出ていないポッドもある。

以上のように 4 年生にとっては成長の速度、成長のしやすさ、葉の色など相違点がわかりやすい活動となった。

成長したきゅうりを収穫し食した。食す活動も①味付けをせずに生のまま収穫した牧野きゅうりと市販のきゅうりを食べ比べる。②同じ調理法で調理した牧野きゅうりと市販のきゅうりを食べ比べる。の 2 回の活動を行うことにした。特に今年はコロナ禍で調理ができないので、とかの元気村の方に調理をお願いした。

生で食べた時は、

- ・牧野きゅうりは硬くて、普通のきゅうりは柔らかく、普通のきゅうりのほうがおいしかった。
- ・牧野きゅうりは苦くて、普通のきゅうりのほうが甘かったです。
- ・牧野きゅうりは苦くて、種が大きかったです。
- ・実は牧野きゅうりのほうが大きい。 などの感想があった。

次に、きゅうりと豚肉、パイナップルとを炒めたものを作ってもらった。児童は、

- ・前、生で食べた時の牧野きゅうりは苦かったけど、料理されたものは、お肉とあい、カリッと
- して、おいしかった。
- ・普通のきゅうりは同じ味だった。牧野きゅうりは苦みじゃなくて甘みが強くなっていた。

等の感想があった。

(3) 成果と課題

- ・4 年生にとって比較することはものの見方として付けたい力である。対比できるものとして市

販のきゅうりを同時に育てたために、成長の様子や試食の味まで様々な場面で比較することができた。

- ・市販されることがなく、自家消費分しか育てられていなかったものを、地域の方の協力のもと学校菜園で育て、しかも食することができた。児童の中には、自宅で育てようとする者、持って帰って家で保護者と調理する者もいた。

- ・4年生では理科でヘチマの学習が行われているので、まだカリキュラムマネージメントの余地がある。

- ・総合的な学習をプロジェクト型学習に切り替えていく中で、まだまだ、プログラミング的思考にのっとったものになっていない。

Ⅲ 論語学習（6年）

(1) 導入の目的

佐川町出身で明治以降に活躍したすべての先人は、江戸時代半ばから明治初期にかけて佐川にあった「名教館」で学んでいる。名教館は、佐川の領主であった深尾氏が教育のために建てた塾である。ここで論語も教えられていたことがあるので、思いやりや感謝の気持ちなどの人間力を高める学習の一つとして論語を取り入れることにした。

(2) 展開

6年生児童は5年生時より論語学習に取り組んでいる。前年度と違うところは、学習の内容を自分の生き方を考える学習とし、将来を見据えた高い志をもつことをねらった。そのために、生きていくうえで大切にしたいことや必要だと思うことを考えさせた。指導者としては論語で教えることを心掛け、本年度は他教科と関連させて行うことを目指した。

① 防災学習と関連させた論語学習

防災学習では、故きを温ねて新しきを知ることは欠かすことができない。だから、過去の事実や先人の教えを知ること、新しいことや今のことについて学びが深まる学習である。また、自分たちが学習して満足するような学習ではなく、子どもや高齢者、身体障害者にとって安全なのかという他者の視点を取り入れる防災学習と論語学習は似通っているので取り組みやすかった。

② キャリアノートに論語

毎学期の目標を立てる時に論語の一つを選び、その目標を達成するための励みになるようにした。最初は月ごとに選んだ論語・今月できなかったこと・できたこと、今後頑張りたいことを書くようにしていた。しかし、児童の書きぶりが「どうしたらできるようになったのか」となり、なぜその目標が達成できたかを書くようになった。それを紙で行うのではなく、タブレットのロイロノートを使った。毎月蓄積が増え、手軽に見返すこともできた。

(3) 課題と反省

① 児童の変容

- ・学習に向かう態度が良くなった。
- ・掃除や面倒なことにも最後まで取り組めるようになった。特に掃除では、掃除場所に行かなかった児童が、下級生に掃除を教える姿も見られるようになった。

(表2)	友だちに関わること	学習に関わること	クラスの雰囲気に関わること
R2 6月	9.41	8.55	9.79
R3 1月	11.04	9.88	11.62
差	1.63	1.33	1.83

・他人に対してきつい言い方をする児童が、おだやかな言い方で友達と接するようになり、表情も柔らかくなった。

QUの調査でも表2のようにすべての数値が向上した。

6. 今後の課題・展望

さかわ未来学はまだ2年目であるが、教職員の反省としては、

○授業中の態度に落ち着きが見られ、学習に対して意欲的になった。

○そうじを1～6年生までで班を作っているが、6年生が低学年児童に対して優しい言葉がけで指導できるようになった。

○休み時間を過ごす際に、友達同士のトラブル自体が減った。

●学力が向上している実感に乏しい。 がある。

本年度の学校生活アンケートをしてみる。質問(1)学校が楽しい(2)みんなで何かをするのは楽しい(3)勉強がわかる(4)学校の先生は話を聞いてくれるについて、令和元年と令和2年を比べたものが表3である。

	R2年度	R元年度
(1)	92	81
(2)	96	91
(3)	81	86
(4)	95	94

(3)勉強がわかる以外は令和2年度に向上し、90%以上の児童が肯定的である。学習については教員の意識と同じように「勉強がわかるようになった」と児童が思っていないこともわかる。

だから、今後は、児童、教職員ともに学力が付いたと実感できるような取り組みをする必要がある。

本年度は6年生のみタブレット1人1台の環境で学習を行っている。論語学習では論語カルタをタブレットで読めるようにし、素読を行ったり、自分が選んだ論語をロイロノートで共有したりと行っている(写真2)。来年度からは1年生から1人1台の環境が整う。さかわ未来学で行う教材とICT機器を組み合わせ、教科のねらいに沿ったカリキュラムにさかわ未来学を定着させたいと考えている。



7. おわりに

さかわ未来学を取り入れて教職員に変化が見えている。本校では学校経営について石隈(東京成徳大学)・家近(大阪教育大学)教授に分析をいただいている。その調査の「(1)教師の児童への関りの積極性」、「(2)教職員同士のつながり」の項目を見ると(表4)、両項目とも向上しており、教職員はまわりの教職員とつながり、積極的に児童に関わっていると実感していることがわかる。今後も教職員が共に支え合える活動をし続けることによって、さかわ未来学をより発展させたい。

	R元年7月	R2年7月
(1)	3.00	3.23
(2)	2.83	3.22
		4点満点

最後に本校の実践に際して指導・支援してくださっている佐川町・佐川町教育委員会及び関係者の皆様、教頭をはじめとする教職員に深く感謝の気持ちをささげたい。

8. 参考文献

- ・さかわ未来学構想振興計画 R2.3月 佐川町教育委員会
- ・こころと頭を同時に伸ばすAI時代の子育て H30.9.30 井岡由美著 高濱正伸監修